

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年6月号

平成十八年六月一日発行 第十六巻第六号 通巻第一八〇号（毎月一回一日発行）  
平成二三年九月十八日第三種郵便物認可



# 春 氷

高橋将夫

植木市初めの鉢へ戻りたる  
種案山子話したがつてをりにけり  
風車ほどには知恵の回らざる  
朝顔も苦楽の種も蒔かれをり

流し雛時流に乗つて流れをり  
次の世を覗いてみたき日永かな  
この世にもかの世にもある花御堂  
春風が岩に吹き込む命かな  
春水でぬぐふ諸刃の剣かな  
龍天に登り膨張する宇宙  
坐忘とは岩に張り付く春氷

# 花の山

富松寛子

桜東風発心の珠数とり出す  
踏み出してあとは委ねる蝮の道  
青石の縞目に沿うて春の雨  
草餅を買うて迷うてをりにける  
先達の朱き錫杖竹煮草  
南天に星のあつまる夏岬  
魂のきらきら灯蛾の舞うてをる  
箒目の渦となりたる安居寺  
石菖や幾万の手を清めたる  
南無大師遍照金剛背ナ涼し

## 特別作品

薬師仏の胎内潜る土用かな  
鯰飛んで白き光となりにけり  
菩提子の舞ひ新しき生命かな  
弦月や真珠はぐくむ西の海  
いささかの地酒に酔うて踊りけり  
羯諦羯諦金色のあわだち草  
海しずか檜山に雪の降り積もる  
涅槃西風ふり返りたる玄武かな  
骨太き空海のコゑ山笑ふ  
結願の鐘に合掌花の山

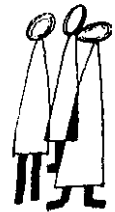
# 槐安集

市場基巳

山山の眠りてゐたるよき日和  
火恋し鳩に胸せしたのちは  
辻堂に玄冬の蠅生きのびし  
やはり酔ふウキスキーボンボン寒眼張  
磯の鵜の真昼は近し花椿

水野恒彦

啓蟄の生きもの雨の日の暮色  
凧のむれ向きみな同じわたつうみ  
鶴引くやくれなる零すこともなく  
ことのほか亀鳴くことの寂しさに  
わが血より濃かれたとへばサイネリヤ



石脇みはる

冬山へ榊を剪りに入りけり  
イタリアンチーズ一片さくらかな  
大きぼてん真二つに切る春日中  
遊びせんとて砂地が原の杉菜かな  
山櫻重箱空ラとなりにけり

竹内悦子

亀鳴くや朱の鳥居をくぐりをる  
露味噌や古びてゐたる三冊子  
水甕に雨のしずくや花祭  
海見えて波の音なき涅槃かな  
寸<sup>ずんどう</sup>渡に桐の紋ある櫻かな

延 広 禎 一

船板に鯛跳ねてをり涅槃西風  
花篝 両性 具有の面テかな  
春の瀧行衣ぎやういに透ける梵字かな  
火渡りのむかう菜の花畑かな  
潮目さくら旬会開設いま男時となりぬ桜東風

中 島 陽 華

春光のうつぽぽうぽ草の上  
春疾風甲陽園のケーキかな  
玉筋魚や天狗が蓋を押さへをり  
遠ざかる物売りが桶月日貝  
春霞空の汐波み車かな

栗 栖 恵 通 子

白粥に膜ありにける春の暮  
横向きに鎌かけてある日永かな  
秒針のけずるこの世よ山笑ふ  
春月とパスタを銀の匙の上  
恋猫に仮花道のありにけり

加 藤 み き

よいしよよいしよ臙の階をのぼりけり  
たん瘤を飾りとしたり花の山  
春菊の巖に紛ふ根元かな  
磯巾着棹元に睡たきまでの空があり  
白椿戦棹元のことは語らざり

大島翠木

大波のうねり高まる寝釈迦かな  
丸にちよん省二の雁の帰りけり  
朝のモーツアルト啓蟄の雨なりき  
花片栗鳥に囀されひらきけり  
春障子白の全し弥勒かな

雨村敏子

山の池に春の鴨をる明るさよ  
この先の谷の榊と春蘭と  
つはぶきの青ここよりは神の庭  
メビウスの帯や蛙の目借時  
女雛よりまづとり出だす笑顔かな

黒田咲子

みささぎの多羅葉の木のひこぼゆる  
うら声や龍の玉とはこそばゆし  
三月のきつねささげの日和山  
鷹鳩と化して目と脚赤くなる  
玉蘭のこの冷たさを何としよう

小形さとる

田鳧鳴くや寺ももたず弟子ももたず  
春満月呱呱のこゑより始めむか  
五十路また鴨の脛かと思ふなり  
さらし葱主は何処あるじに隠れしか  
灸やいとばな花萎えて体の重さかな



# 槐市集

岩月優美子

産声の歡喜草の芽萌えにけり  
ちちははの笄の還る涅槃西風  
幾万のいのち虚空に鳥帰る  
水神や地下に雪解の鼓動かな  
縄文の響きのありぬ山霞

宇田喜美栄

ものの芽や杭打つ音の空にある  
白梅や鴟尾鳴つてをる風の渦  
野山いま涅槃の雪のなごりかな  
川風やスカーフに髪包みこむ  
手を打てば矮鶏ついてくる露の臺

植木戴子

恋猫の目でものを云う朝かな  
湖の晴れし山葵の棚田かな  
福祿寿春の扉を開けてをる  
夕空へ白蓮の風続きをり  
夜の梅ワイングラスを洗いをる

植松美根子

陵へ三月の水飲んでをり  
囲ひなき墓の仲良き彼岸かな  
まつさきにつくし見つけし里歩き  
水門に伝言板ある春の池  
千年の歩み重ねし遍路道



# 槐集

## 高橋将夫選

牧神のフルート蝶の生まれけり 岡崎

近藤 喜子

カルストの岩に溶け入る初蝶よ 岡崎

岩月優美子

春の夢この巻貝の奥にかな  
透きとほるまで異次元へ揚雲雀

星影はダイヤの光り復活祭  
眼の前に布達<sup>ポタ</sup>拉<sup>ラ</sup>の迫る春の夢

春風の裏よりふつと来る愁ひ  
真つ青な地球とはこの石鹼玉

メビウスの帯の中なる遠霞  
バオバブは折りの形蜃気楼

啓蟄の日本列島ひたおもて 枚方

中野 京子

しろがねは神巫<sup>いぢこ</sup>のいろか猫柳  
春星やましろき紙をひろげたる

本多 俊子

影一つ羽振りたちたり春障子  
夜半の雛一笑一若なりしかな

彗星の塵<sup>ちり</sup>謎めくや朝の梅  
いたち草匂ふあたりがけものめく

桃咲いて風の手のひら風の声  
迦楼羅炎のかげろうてをる飛鳥なり

砂ふめば水にじみきて彼岸入  
赤米を食して飛鳥や金鳳華

水の音地の音まどか仏生会

近藤きくえ

大三輪の神杉に降る春の雪 枚方

谷村 幸子

花冷や間近なりける斧こだま  
水神の笑まひだしたる春の川

山の風野の風ここに露の臺  
郵便のくる日続きて桃の花

白き骨きれいに残り蒸蝶  
回廊の花明りして布袋かな

佗助の花ざかりなり星の塚

# 銀河往来 高橋将夫

◇「擬人法の句の詠み方」

二方向のアプローチ

擬人法の句を作る場合、二つのアプローチの方法がある。①「もの（景）」から入る手法と、②「心」から入る手法である。

海に出て木枯帰るところなし 山口 誓子

掲句を例に、説明しよう。①「もの（景）」から入るとは、「海に吹く木枯」を見ることから始まり、海の木枯に実相観入し、「帰るところなし」の結論に到達する場合である。②「心」から入るとは、例えば「虚無的な心境」にあるとき、その観念の具象化として「海に吹く木枯」を想起するような場合である。「思い」を「海に吹く木枯」に託すわけである。

し残しのことなにもなし下り鮎 将夫

もう一例。「下り鮎」から入ったのなら①のケースで、「あることとの達成感なり、それへの願望」から入ったのなら②のケースである。

①と②は全く異なるアプローチの方法であるが、作品となる段階では密接な関連性を持つてくる。「達成感（願望）」がなければ、下り鮎を見ても、「し残しのことなにもなし」などという感慨は湧かないだろうし、逆に、「キラキラ輝いて河を下る鮎の群」を知らなければ、「達成感（願望）」の思いを託す対象として下り鮎が想起されることはないだろう。自然と人が一体となるとはこういうことだと思ふ。

春昼のビルたくさんの人を呑み

擬人法では、例えば掲句の「ビルが人を呑む」のような月並な表現に満足してしまいがちで、逆に独創的すぎると、今度は読

者に伝わらないという難しさがある。また、前記①の「もの（景）」による場合、ものは眼前にあることを要しないから、思考による操作だけに依存し、単なる言葉遊びに終わることが多い。掲句はビルに人が入っていく状況を「人を呑む」と言い換えただけにすぎない。〈蠅取りリボン静かに蠅を殺めをり〉〈緋に燃ゆるカンナ精力もて余し〉〈突風に枯木がみな狂い出す〉なども同類。

「俳句は精神の風景、観念の具象化」であってみれば、提示された作品は自ずから寓意、象徴、暗喩、擬人法的側面を持つ。

（『俳句』五月号より転載）

◇「槐集」観照

牧神のフルート蝶の生まれけり 近藤 喜子  
やわらかなフルートの音に蝶が舞う。まるでフルートの音から生まれたように。牧神はローマ神話の半人半獣。ローマ神話の世界が見事に俳句に。

影一つ羽振りたちたり春障子 中野 京子  
障子の影が羽ばたくようにふわりと立ち上がった。登場人物は誰か。幽玄の世界が広がる。

水の音地の音まどか仏生会 近藤きくえ  
水の音がしている。大地からは虫の這い出す音や、芽吹き音などがきこえてきそう。それら一切がまどかという。これが、病気を一度にわたり克服された作者の精神の位相。

（以下略）